

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。  
近江日野商人館では、「日野ひなまつり紀行」に協賛し、三月八日まで、「ひな祭り、手まり展」を開催し、「ひな人形」と「御殿まり」が織りなす日本古来の「ひいな遊び」の世界を再現しています。ぜひ、お越しください。

## 日野商人の行商活動

日野椀や日野合葉を、全国に行商した日野商人は、やがて他国の産物をも仕入れて行商を行うようになります。

群馬県の下仁田町には、中仙道から少し離れた脇道に、「西牧関所」と呼ばれる小さな関所が江戸時代であり、そこを通過した旅人の様子を記した「通行改日記」が残されています。

元禄六（一六九三）年から享保六（一七二一）年の間に、この関所を通過した延べ三十四人の日野商人の記録も見られ、この頃、すでに関東地方で商う日野商人が多かった様子がうかがえます。

三十四人の中には、同じ人物と思われる商人が毎年のように西牧関所を通過しており、この頃、すでに関東地方のなじみ客に訪問販

売を行っていた様子です。

「椀売り」や「葉売り」にと、日野椀や日野合葉と思われる物を商うために関所を通過している日野商人、あるいは「木綿布売り」、「帷子（衣類）売り」、「呉服売り」、「小間物売り」、「打物（刃物と考えられるもの）売り」の商人、また「絹買い」、「麻買い」にと、商品の仕入れのために関所を通過している商人の姿も見られ、日野商人が関東地方で生産される糸や布、呉服なども多く商っていた様子がわかります。

日野商人が、このような他国産の布類を商ったことは多かったようで、江戸時代の京都・大阪では日野商人が仕入れた関東産の布類が「日野絹」、「日野きれ」と呼ばれてもてはやされたと伝えられ、日野商人による「産物廻し」の様子を知ることができます。

日野商人や近江商人と言えば、

天秤棒一本で全国に商品を売り歩

いたかのような姿が思い浮かびますが、この日記によれば、「小間物（荷物四駄（馬四頭分）」、「帷子荷物（十三駄）」など、多くの馬に商品を担わせて商いを行っています。天秤棒は、戸別に商品を売り歩く時の道具で、遠距離に多量の商品を運搬する時には、牛馬、荷車、船、飛脚便などを使用していたのです。

また、この日記には、日野商人の名前の横に「他三人」、「他五人」などと記され、主人につき従う奉公人の人数も記されています。おそらく、彼らが馬の背の商品を天秤棒に小分けし、戸別に売り歩いたと思われるます。

宝暦四（一七五四）年に、仙台藩（茨城）で記された記録には、日野商人のなかで最も財をなしたと言われる初代中井源左衛門が藩内で行商を行っていた様子が記録されています。

それによれば、中井源左衛門が雇っている手代（番頭）の指示で、数十人の奉公人が合葉や小間物、木綿や絹の布を村々に分散して売り歩き、その代金はすべて貸し売りとしていたために、何十両もの未払い代金に苦しむ農民が多いと記されています。

貨幣経済が十分に浸透していなかった東北・関東地方の村々に、多くの奉公人を動員して高い活動を繰り返すという客にとっては魅力的な商法を展開していたのです。

行商で蓄えた資金で、やがて日野商人は関東地方を中心に多くの出店を構えるようになります。

◀日野商人（細田善兵衛【大窪】）の行商姿

